

主 文
本件控訴を棄却する。
理 由

弁護人の控訴趣意は別紙のとおりである。

第一点

釧路簡易裁判所裁判官今井巖が昭和二十四年六月十一日被告人に対し原判示第一の事実につき逮捕状を発し次いで同年六月十三日勾留状並びに本件全部につき搜索差押許可状を発布し乍ら本件第一回乃至第六回公判に關与の上証拠調等を為し原判決が右証拠調における証拠を引用して原判示事実を認定したことは洵に所論のおおく要旨第一に於けるものである。しかし刑事訴訟規則第一百八十七条第一項但書によれば事件の審判に關与すべき裁判官は勾留に關すく要旨第一に於ける処分をすることができない旨を規定しているのであるが、同条第二項但書によれば急速を要する場合は右第一項但書の規定にかゝらず自ら勾留処分を為し得る旨規定し、右第一項但書は右第二項但書と比照すれば事件の審判に關与すべき裁判官をして事件につき予断を懷かしめないよう第一回公判期日迄はなるべく勾留に關する処分をさせない趣旨の一種の訓示的規定とも解せられる。しかしてすでに最高裁判所判例（昭和二十五年四月十二日大法廷判決、判例集第四卷第四号五三五頁以下参照）も逮捕状を発し起訴前の勾留に關する処分に関与し且つ起訴後第一回公判期日までに保釈請求却下の決定をした裁判官が第一審の審理判決をした場合におく要旨第二に於いてすら憲法第三十七条第一項の公平な裁判所の裁判でないとはいえないと言つていたのであつて本件起訴前く要旨第二に勾留処分をした裁判官今井巖がその審理に關与した（第七回公判期日以後他の裁判官が關与し審理を更新し判決をした）との理由のみで其の訴訟手續が違法であると論斷するを得ない。従つて該訴訟手續中に為された証人尋問の調書は其の証拠能力において欠くところがないのであるから原判決が之を原判示事実認定の証拠に引用しても何等判決に支障を及ぼすものではなく論旨は理由がない。

第二点

原判示事實は原判決挙示の証拠により之を認むるに十分であつて記録を精査するも事實誤認を疑うに足る理由がない。弁護人の所論は独自の見解に立ち原審の専權に屬する証拠の取舍価値判斷を攻撃するものであつて論旨は理由がない

第三点

本件記録に現われた犯行の回数、被害物件の価額其の他諸般の事情を参酌すれば原審が被告人に対し懲役二年の実刑を科したのは量刑不当とは言えない。論旨は採用に値しない

よつて刑事訴訟法第三百九十六条により本件控訴を棄却すべきものとし主文のとおり判決する。

（裁判長判事 黒田俊一 判事 猪股薫 判事 鈴木進）